

氏名(本籍)	おお たけ すすむ 大 竹 晋(岐阜県)
学位の種類	博 士(文 学)
学位記番号	博 甲 第 2732 号
学位授与年月日	平成14年1月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	哲学・思想研究科
学位論文題目	唯識説を中心とした初期華嚴教学の研究
主 査	筑波大学教授 博士(文学) 竹 村 牧 男
副 査	筑波大学教授 野 田 茂 徳
副 査	筑波大学助教授 文学博士 佐 藤 貢 悦
副 査	筑波大学講師 Dr. phil. 小 野 基
副 査	筑波大学教授 文学博士 片 岡 一 忠

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、中国華嚴宗の哲学思想的方面に関し、その内容は唯識説にはかならないとの観点からその特質を解明したものである。時代的には初期に限定されているが、これは中国華嚴宗の思想を事実上創造した智儼(602-668)を中心とするもので、さらにその弟子、義湘(625-702)と法蔵(643-712)をも扱っている。このことにより、中国華嚴宗第二祖・智儼から第三祖・法蔵への思想的変遷を跡づけたものとなっている。

本論文の構成は、三部より成る。すなわち、序章、第一部 大乘始教・大乘終教・別教一乗の構造、第二部 大乘始教・大乘終教の論理、第三部 別教一乗の論理、結章というもので、末尾に文献目録を付している。

以上の構成からも明らかなように、本論文は華嚴宗の五教判すなわち小乗教・大乘始教・大乘終教・頓教・円教(別教一乗)のなか、唯識の教理を説かない小乗教と頓教を除くすべてを研究対象として扱おうとするものである。第一部において、それらすべてが唯識説という同一の構造を持つものであることを論究し、第二部・第三部において、その唯識説の具体的な内容を、別教とそれ以外とに分けて究明している。

まず、序章では、本論文にかかる先行研究や方法論等々について説明し、本論文の学界における位置づけを試みる。

第一部では、始教・終教・別教につき、その関係・行位・種姓・生死について、それぞれ章を立てて検討し、さらに始教・終教等から別教への廻入についても検討する。行位とは、十住・十行・十廻向・十地といった修行の階程のなかで、どの段階で不退の位を得るかという問題、種姓とは、仏になる原因をどこに求めるかという問題、生死とは、仏教にいう分段生死と変易生死とをどのように見ていくかという問題である。この第一部では、全体として、智儼の教学が、『撰大乘論』『十地経論』との結合形態にある『華嚴経』解釈であること、すなわち撰論宗・地論宗の思想がその土台になった唯識説であることを論証していく。これに対し、法蔵の教学は、『五教章』までは智儼の立場を色濃く受け継ぐも、『探玄記』等後期になると、一方で『大乘起信論』の影響を受け、他方玄奘の法相宗・『成唯識論』が浸透した時代状況のなかであって、変質していったことを描く。そのなかで、華嚴教学は、始教・終教の唯識説と同一の構造を有するものであり、ただ一つ、無尽の関係を説いて始教・終教の唯識説を完成させることだけが相違点であることをここに論定するのである。

第二部は、別教の基礎になる始教・終教の唯識説に関し、阿頼耶識・末那識・意識・心所の四つの事項に関し

検討する。まず、阿頼耶識に関しては、智儼のその説が、真諦や地論系撰論宗諸師の『撰大乘論』解釈と共通することを明かし、終教の阿頼耶識理解も真諦訳『撰大乘論』にもとづくものであることを指摘して、法蔵の始教は『成唯識論』、終教は『大乘起信論』に拠る立場との違いを明確にする。未那識に関しても、その行位における存否の説を検討して、上述の相違点を再度明確にしている。意識に関しては、転職得智が起きる場を八識に求めるか意識のみに求めるかの問題を検討して、同様の結論を得る。最後の心所の検討も、未那識と相応する心所の問題、一意識計の吟味し、同様の結果を得る。こうして、始教・終教ともに『撰大乘論』に基づく智儼の説が、法蔵になると両教を『成唯識論』と『大乘起信論』とに分断する立場へと変化する経緯を明瞭にしている。

第三部は、華嚴教学独自の立場、すなわち相即相入にもとづく無尽の関係を説くという別教の思想構造について、『華嚴経』「明難品」の解釈、三性説、因の六義、性起説、断惑説を主題に、集中的に究明していく。「明難品」の解釈に関しては、同品の一文をめくり、智儼・法蔵が、『撰大乘論』の説く同時更互因果の説と『十地経論』の説く因生・縁生に関する四句分別の説から、相即・相入の論理を導き出していることを指摘して、別教の論理の淵源を明らかにする。三性説に関しては、智儼らの三性説が、真諦訳『撰大乘論』に対する解釈法である「行三性」「解三性」の二種の三性説にもとづく独特なものであることをつきとめ、法蔵の『五教章』の三性説もこれを玄奘将来の三性説に合わせて構築し直そうとするものであったことを明かしている。因の六義をめぐるのは、華嚴宗の縁起説のなか、とくに因・縁の相互関係について究明するもので、因（直接原因）のみでなく縁（間接原因）も因となると考える華嚴独自の思想の理論的背景を『撰大乘論』『十地経論』に対する智儼らの解釈にさかのぼって丹念に究明する。その検討のなかで、法蔵は『探玄記』に至るとこの因の六義説を放棄するという、興味深い事実を指摘している。性起説をめぐるのは、華嚴宗の縁起説のなか、特に因・果の相互関係について究明するもので、華嚴宗の時間論を論じたものともなっている。華嚴経学の因果説は、現在における因・果概念の相互関係であると明かし、そこに龍樹『中論』に対する独自の解釈が介在していたことを指摘する。最後に断惑説に関しては、清浄なる本体が惑を起すという別教独自の煩惱論の構造を明らかにし、その断滅の方法論として、智儼は「行唯識」「解唯識」の二種による唯識観を説いたことを明かす。一方、法蔵はこれを説かず、惑から智への転換に関し曇遷の『大乘止観法門』の影響を受けていると指摘する。

結章では、上述の各章で明らかになった結論をまとめ、今後の課題を展望している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は初期華嚴教学の思想的特質を、唯識説として究明することに焦点を合わせたものである。従来、華嚴思想の研究は、ほとんどが華嚴独自の思想、すなわち円教（別教一乘）の思想のみをとりあげるものであったが、本論文では、華嚴教学の五教判を考慮し、そのなかの大乘始教・大乘終教をも華嚴思想の一環としてとりあげ、その全体の有機的連関を究明しており、そこに優れた視点を見ることが出来る。また、従来、華嚴思想を他の先行する思想との関連で考察する場合、せいぜいその源流となった地論宗との関係のなかでの考察にとどまったのに対し、智儼当時の思想界の状況をよく見極め、真諦訳『撰大乘論』およびその後の撰論宗の思想動向との関係を種種跡づけたことは、本論文の大きな成果である。しかもこのような視点から、華嚴教学は唯識思想を土台としてそのすべてが唯識説の展開であることを多方面にわたって論証しており、斬新な華嚴教学理解を示しているのは注目に値する。

華嚴思想を唯識説として捉えることは、それを中国独自のものとしてより、印度仏教に連絡しているものとして捉えることを意味する。本論文は、『撰大乘論』や『十地経論』等、サンスクリット語・チベット訳文献のあるものはすべてそれらを参照し読解して論究しており、従来の中国仏教研究の方法を大きく超えたものになっている。さらに漢文文献についても法相宗の末註文献等を含め広汎に文献を渉猟し、従来知られていなかった智儼等の逸文をもよく集めるなど、その研究領域はすこぶる広範囲にわたっている。

本論文における特筆すべき知見として、以下のことがある。①智儼『搜玄記』にすでに実質的に五教判の教判が存在したこと、②智儼は極楽浄土を別教の蓮華蔵世界への入り口とするが、法蔵はそのことにまったく言及しなかったこと、③智儼・法蔵は『瑜伽論』の種姓を真如としつつ『十地経論』に基づき因縁相対のなかで捉えたこと、④智儼は一闍提の別教への廻入を詳しく説くが、法蔵はこのことを顧みず、五教の連続性を重視しないこと、⑤智儼の阿頼那識説は真諦ないし地論系撰論宗の解釈に拠っていること、⑥智儼は『撰大乘論』を介して始教と終教とを結びつけるが、法蔵は始教は『成唯識論』、終教は『大乘起信論』として両教を分断し、『撰大乘論』から離れていくこと、⑦別教の代表的教理である相即相入の論理は曇遷の『華嚴経明難品玄解』において準備されており、智儼らはこれを承けていること、⑧華嚴宗の三性説は真諦訳『撰大乘論』に対する靈潤（地論系撰論宗）の解釈法「行三性」「解三性」の枠組みのなかにあること、⑨智儼は「行唯識」「解唯識」の唯識観を説くが、法蔵らはこれを説かないこと、⑩性起説は中観説と深い関係にあり、中観派は相互依存的な概念の単独存在を否定するのに対し、華嚴教学では相互依存的な概念が互いに唯一者となりあって同時に存在すると見ること、等等。以上は、学界に大きく貢献する成果である。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。